
Forever memories...

mottsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Forever memories . . .

【コード】

N1291V

【作者名】

mottsu

【あらすじ】

ある日健也に一本の電話が…最愛の人が記憶をなくし今自分の目の前…

電話…

今日は8月8日、みさとはいつもと変わらぬ朝をむかえた。
だが彼女は少し気持ちが沈んでいた…

8月7日 午後8時

みさと「えーっ！明日あかんようになったあ！？」

みさとは信じられないとばかりに驚いた声を出した。

健也「ごめんな…。試合が入っちゃって…」

健也は申し訳なさそうに言った。

み「だって明日は…」

健「本当にごめん！近いうちに埋め合わせするから今回だけは許して！！」

み「もお…わかったよ。今回だけは許してあげる。試合頑張ってる！」

そう言っただけで彼女は微笑んだ。

健「ありがとう。じゃあね…バイバイ」

み「うん。ばいばい」

みさとは電話を切り、呟いた

「もお…しょうがないなあ…」

そう呟く彼女の顔は言葉とは裏腹に優しい顔だった。

(ほんまやったら今頃健也と…) 昼食を友達のあやと食べながらみさとは思っていた。

浮かない顔をしているみさとにあやは

「今日は無理でもまた埋め合わせするって言ってたんやる？」
と慰めの言葉をかけた。

み「そうなんやけどさあ…今日は大切な日やったのにさ…」
不服そうにみさとと言った。

健也に悪気がないことも、大事な試合だということもみさととはわか
っていた。

だから許したのだが、やはり会いたかったという気持ちが強かった
のも確かだった。

み「やっぱり私行ってくるわ！試合なら夕方には終わるやろうし…」
あ「えっ！？今から！？」

あやは驚いたがすぐにみさとの気持ちを察して見送った。

みさとは急いで新大阪に向かった。

新大阪に着き静岡までの切符を買い、急いで新幹線に乗り込んだ。
彼に会いたい…ただそれ一心で……

午後5時過ぎ

静岡に着いて、みさととは新幹線から降りた。

ちょうどその頃健也の試合が終わった。

(コーチも勝手だよな…前日まで試合のことなんて言わなかったの
に…)

健也は頭の中で文句を言いながら静岡駅に向かって歩いていった。

その時電話がなった。

健也は期待して携帯を見た…

(みさとだっ！)

健也は嬉しそうに電話に出た。

健「もしもし、みさと？」

『もしもし…』

健也は驚いた…無理もない…男の声だったのだ…

健「……えっ…!？」

普通なら浮気と考えるだろう。

しかし健也は嫌な予感がした…もうみさとに会えないようなそんな気がした…

男『あの…もしもし？松山健也さんですか？』

健「そうですね…」

男『警察です。実は…』

話が一通り済んだ後健也の顔は青ざめていた…

電話の後健也は言われた場所へ走った。

そこは病院だった。

病室に行くと知らない男の子とその母親が居た。

年はだいたい4、5才だろうか…泣きながらベッドの隣に立っていた。健也はベッドを見て言葉をなくした…

ベッドには頭に包帯を巻き顔色は悪く人口呼吸器が付けられ、横にはピツピツという寂しい音がしていたのだ…

健「みさと…？俺だよ…健也だよ…？目覚ましてよ…」

健也は涙が止まらなかった…

「本当に…ごめんなさい…!」

突然男の子の母親に頭を下げられた。

事情：

みさとは健也の家の最寄り駅で電車を降りた。

道を歩いていると4、5才の男の子が居た。

その男の子は突然道を渡ろうと走り出した。

そこに車が……

みさとは考える前に走っていた。

男の子を抱き抱え、車の前からよけようとした……だが遅かった……

もう間に合わないと感じたみさとは男の子を離し道路の横に押し出した。

まもなく母親が現れた。

「悠!!」

そう呼ぶ声も周りの悲鳴でかき消された……

母親は人が集まっている所へ行ってみた。

するとそこには意識のない高校生ぐらいの女の子みさこが居た……

そこに悠が近付いた

「お姉ちゃん：大丈夫?ごめんなさい……」と言って泣き出してしまった。

そして誰かが呼んだ警察と救急車が現れ、みさたと親子を運んで行った。

宣告：

健也は悠の母親から全てを聞いた。

言葉が出なかった。

みさとが子供好きだということは知っていた。

みさとはデート中でも小さい子を見ると優しい顔になっていたからだ。

でも健也は信じる事ができなかった…

健（自分を犠牲にしてまで…）

だからと言って2人のこともみさとのことも責める気にもなれなかった。

みさとが守りたいと思ったのだから…

それから毎日健也は病院に通っていた。

みさとの両親は大阪にいたのであまり来れなかった。

みさとが病院に運ばれてから1ヶ月がたった。

まだみさとの意識は戻らない…

看護師「松山さん、ちよつといいですか？」

健「はい。」

健也は医師の所へ呼ばれた。

医師「坂元みさとさんのことですが…もうあれから1ヶ月経ちます。僕も驚いたんですがね…まさかあれだけの怪我をして1ヶ月間ももっているなんて…」

健「はあ……………」

医「言い辛いんですが…もうそろそろ覚悟をしていただいた方が…」
健「それは…つまり……………」

医「はい。これから意識が戻る確率は極めて少ない。もし戻ったとしても…何らかの障害が残る可能性が高いです。」

健「そうですか…」

医「ご両親には先程連絡致しました。」

健也はどうしていいかわからなかった…

最愛の人がもうすぐ居なくなるかもしれないという事実を信じるこ
とができなかった…いや…信じたくなかったのだ…

自分が彼女の意識が戻ることを信じてあげなければ、彼女は本当に
居なくなってしまうような気がしたのだ…

健也はみさとがまた元気になることを信じようと決めた。

宣告：（後書き）

登場人物の紹介が遅れてしまってますみません（^| ^ ;）

坂元みさと

（意識不明中・高3・大阪人）

松山健也

（みさとの彼氏・高2・静岡出身）

北野悠^{ゆう}

（みさとが助けた男の子・5才）

北野小絵^{さえ}

（悠の母親）

意識…

9月12日

宣告を受けてから3日が経った。

みさとの意識は戻らないままだった。

健也は信じると決めた……だがだんだんと不安になってきていた…
健（みさとが死ぬなんてあり得ない…そんな事考えたらだめだ…）
健也は不吉な考えを頭から飛ばすように頭を振った。

その時…健也は驚くものを目にした…みさとの目から涙が流れてい
たのだ……！

健「…み…みさとっ！？俺が考えてたことがわかったの？大丈夫だ
よ…俺もうそんなこと考えないから…だから…戻って来てよっみさ
とっ！」

健也は必死だった。

みさとが戻って来る…そう考えるだけで嬉しかった。

健（障害があつたつていい…俺が支えてあげればいい…幸せにすれ
ばいい…だから…だから…こっちにおいで……！）

その強い想いが届いたのかみさとの目が開いた！

健「おかえり…おかえりみさと！よく帰って来たね！よく…頑張っ
たね…。」

健也はそう言ってみさとの頭を優しく撫でた。

まもなく医師がやってきて検査を行なった。

その間みさとは一言も喋らずばーっとしていた。

医「今のところ異常はありませんが、また明日細かく調べてみない
ことには何とも言えませんね。しかし意識が戻ったのは奇跡です！
早く回復できるように全力を尽くします！」

健「よかった…ありがとうございます。」

健也は嬉しくて堪らなかった。

最愛の人が戻って来てくれたのだから…

話を終え、みさとの元へ戻った健也はみさとに話しかけた。

健「みさと…この間は1年の記念日だったのに会えなくなってごめんね。でもみさとが入院してる間は毎日来るからね…！」

健也は笑顔でそう言った。

みさとも笑顔で答えてくれる…そう健也は思っていた。

だがみさとは笑っていなかった。

健「まだ怒ってるの…？」

健也は恐る恐る聞いてみた。

しかし…

みさとは不思議そうに健也を見つめていた…

そして初めて口を開いた。

み「私はみさとっていう名前なんですか？あなたは誰？私のこと知ってるん？ここってどこ？」

健也は目の前が真っ暗になった…

健（みさとは自分のことすら覚えていない…もちろん彼氏である俺のこと…）

いわゆる記憶喪失…つまり『ここはどこ？私はだれ？』状態だった…

健也は急いで医師に伝え、検査をしてもらった…

記憶…

医「記憶喪失ですね…しかし話す時は大阪弁なので記憶の奥には何か残っているようです。」

健也は駆け付けたみさとの両親と医師の話を聞いていた。

両親「ありがとうございます。」

両親はみさとの所へ行き、健也は昨日から病院に泊まっていたのでとりあえず家に帰ることとなった。

両親もみさとにいろいろ話して聞かせた。

だがみさとは思いつく気配はなかった。

それから毎日健也はみさとに思い出を話した。

みさとは思いつくことはなくても笑顔で話を聞いていた。

健「それでね…みさと、ちゃんと聞いているの？」

みさとがずっと笑顔だったのが気になって健也はそう言った。

み「聞いているよ。」

健「何がそんなにおかしいの？」

み「なんか健也くんの話聞いていると懐かしいような安心するような感じがするから…」

健「そっか。あつ健也でいいよ。『くん』付けで呼ばれると違う人みたいだし…」

健也は嬉しかった。

何か思い出しかけているのかもしれない…

コンコンッ

健「はい。」

健也はドアを開けた。

そこには知らない男の子が立っていた。

年はみさとと健也と同じぐらい、身長は175ぐらいかそれ以上だろうか。

天然パーマが印象的だった。

ケーキ…

？「…えつと…ここって…？」

健「…どちら様でしょう…？」

いきなり知らない人が入って来て健也は戸惑いながら聞いた。

？「あの…坂元みさとの病室ですよね？」

健「みさとの知り合いですか？」

？「はい。幼なじみの泰成です。みゃーちゃんいますか？」

健「みゃー…？あつみさとなら中に…」

健也は泰成を部屋に入れた。

それを見たみさとは首を傾げた。

み「健也…誰…？」

健「みさとの幼なじみの泰成さんだつて。話聞いてみたら？何か思
い出すかもしれないじゃん。」

み「うん。」

泰「みゃーちゃん…泰成やで。幼なじみでな、小学校まで同じ団地
に住んでて、家族ぐるみの付き合いやったねん。」

み「みゃーちゃん…？」

その時みさとは懐かしいと感じた。

泰「みゃーちゃんのことやで。」

み「そうなんですか…？」

泰「敬語はやめてよ。あつそうそう、はい！」

泰成はそう言つて笑顔で箱をみさとの前に置いた。

み「…？これは？」

泰「昔食べたものなら何か思い出すかなつて思つて！開けてみて…」
みさとはそつと箱を開いた。

そこには美味しそうなケーキが入っていた。

み「わあ…！ありがとう！」

泰「これが幼なじみのお母さんが作ってくれた黒糖のケーキ、それ

からこれがみゃーちゃんのお母さんが作ってくれたガトーショコラ、
それでこれが僕とお姉ちゃんで作ったショートケーキ！みゃーちゃん
が好きやったものを皆で作って持って来たねん。」
みさとは説明を聞いた後、一口ずつ食べた。

「みゃーちゃん、向こうでスゴクしようよ！」

「今としみちゃんとゆきなちゃんとお片付けしてるから待っててな
！」

「こら泰成！あんたも片付け手伝い！ここはうちの家やのにお客
さんに片付けさしてどうするん！？みゃーちゃんもとしみちゃんも
遊んでおいでよ、あとは泰成にさせるから」

「「ううん。やるよ！」」

……と……と……みさと……

みさとは我に帰った。

み「あれっ…？としみちゃん？ゆきなちゃん？…やっくん？」

！……！…？

泰「みゃーちゃん…もしかして…！？」

ケーキ…（後書き）

進むのがゆっくりですみません（<―>）

みさとが見た夢はいつたいなんだったんでしょっつか？

笑顔…

健「みさと…なんか思い出したん？」

み「昔よくその子達と遊んだ気がする…それで…泰成さんのことをやつくんって読んでたような気がして…」

泰「そうやで！そう呼ばれてた！」

み「この黒糖のケーキ、としみちゃんのおばちゃんを作ってくれたの？ショートケーキはゆきなちゃん？」

泰「うん！思い出した！？」

み「昔のことは思い出した…！でも小学校ぐらいまでのことしかまだ思い出されへん…」

健「ゆっくり思い出していけばいいよ。」

み「うん…ありがとう…！」

健「いいよ。じゃあ俺そろそろ帰るね。泰成さん、ありがとうございました！」

そう言うのと健也はみさとの頭を撫でて病室を出た。

健也は病院を出て自転車で家に帰った。

帰っている途中、健也はいろいろな感情が溢れてきてどうしたらいいかわからなくなっていた。

健（みさとの記憶が少しでも戻ったのは嬉しい…とても嬉しい…でも思い出したのは小学校まで…その記憶の中に俺は居ない…小学校の時だって好きな人ぐらい居た普通…なら今みさとは誰のことが好きなんだろう…俺なんかじゃなくて…いや…考えるのはよそう…記憶が戻ったのはめでたいことなんだから…）

健「ただいま。」

健母「おかえり。みさとちゃんに会いに行ってたんでしょ？どうだった？」

健「記憶が戻ったよ！…小学校までのだけどね」

健也は笑顔を作って言った。

健母「そう…！」

その顔がとても寂しそうでせつなくて…健也の母は何も言えなかった。

翌日、健也は朝早くから病院へ行った。

病室のドアをノックしようとした時、みさとの母に後ろから声をかけられた。

み母「健也くん！」

健「おはようございます。」

み母「おはよう。これから先生に検査結果聞きに行くの、健也くんも一緒に聞いてくれない？」

健「…わかりました。」

医「これがみさとさんの脳です。脳には異常ありませんでした。」

み母・健「よかった！」

医「しかし…言いづらんですがね…これを見てください。心臓の写真なんです。ここが損傷を受けているんです…今の医学では治すことはできません…残念ながら余命1ヶ月ぐらいです」

み母「あの…手術をすれば延びることはないんでしょうか!？」

医「残念ですが…」

みさとの母は藁にもすがる想いで聞いたが返ってきたのは予想通りの言葉だった。

健也は状況を理解するのがやっとだった。

話を聞き終え、健也はみさとの部屋に入った。

み「おはよー健也！」

健「おはよう！」

健也はみさとを不安にさせないようにように笑顔で言った。
目の前にあるこの笑顔を守るために…

旧友：

健「体調どう？」

み「いきなりどうしたん？元気やけど…」

事情を知らないみさとはなぜ健也がいきなりそんなことを聞くのかわからず笑いながら答えた。

健「よかった。」

みさとは健也に対してなにか安心感のようなものがあつたのですっかり打ち解けていたが、今の二人に思い出がないことを健也は寂しく思っていた。

コンコンッ

み・健「はい。」

泰「おはよう。今日はな、小学校と中学校の同級生何人が来てくれたんやで！」

み「そうなん？誰？」

？「みつさとー！久しぶり！」

？「やつほーみさと！」

？「よおみさと！」

？「みゃーちゃん元気？」

みさとが知っているのは4人の内2人だけだった。

？「わかる？千尋やで！」

？「彩華やで！」

？「俺は俊や！」

？「翔太やぞ！」

みさとは千尋と彩華という女の子のことは憶えていなかったが俊と

翔太のことは憶えていた。

み「俊…翔太…久しぶり！ち…千尋ちゃんと彩華ちゃんは中学校の同級生…なんか…？」

千・彩「そうやで！」

俊「記憶喪失でも小学校までの記憶は戻ったんやっとなあ？」

翔「だからみゃーちゃん俺らのことは憶えてるんか！」

翔太が納得したように言った。

それからみさとはみんなと昔の話をいろいろした。

千尋と彩華とはさすがに女の子同士なので記憶がなくてもすぐに打ち解けていた。

みんな楽しそうだった。

ただ1人、健也を除いては…

千尋と彩華の話の話を聞いているうちに記憶が徐々に戻ってきていた。今のみさとは思い出しやすくなっているようで元のみさとに戻りかけていた。

思い切つて健也は聞いてみることにした。

健「俺のこともなんとなくでも思い出せた…？」

み「……ううん…ごめん…」

健「そ…そつか。いいよ。」

みさとは申し訳なさそうだった。

それを見た健也は笑顔を見せた。

健也が笑顔を見せるとみさとの表情が明るくなった。

健（みさとの笑顔をなくさせちゃだめだ…）

1時間後…

みんなのことを完全に思い出したみさとは記憶をなくす前の表情だった。

それを見た健也は無性に寂しく感じた。

健（俺じゃ思い出させてあげられなかったのに…）

声…

健也は自分がみんなに見られていることに今初めて気付いた。

健「え…ど、どうしたの？」

健也は驚いて聞いた。

みさとがハンカチを健也の顔に当てた。

健「え…？」

健也は自分の目から涙がこぼれていたのにやっと気がついた。

み「どうしたん？」

健也は考える前に動いていた…

みさとにキスをしたのだ。

周りのみんなは驚いた顔をしていた。

みさととは呆然としていた。

健「ごめん…嫌だったよね…」

健也はそう言い残し病室を出て行った。

誰かがそつと自分の肩を抱いている…

「幸せ…ずつとこうしてられたらいいのにな…」

その人が呟いた…

「いつか…一緒に暮らそう…遠距離してるから…だからいつか一緒に暮らす時が来たら…きつとその時間を大事にできるよ…」

「次会えるのは1年の記念日だね…！」

「ごめんな…。試合が入っちゃって…」

「本当にごめん！近いうちに埋め合わせするから今回だけは許して…！」

《…あつ…この声…知ってる…》

み「健也!!」

みさとは急いで病室を出た。

出入口の所まで走って行くと健也がいた。

み「健也!」

健也は振り向いた。

み「健也…ごめんな…ごめん…私…」

健「いいよ…思い出すのなんてゆっくりでいいから…それに謝るのは俺の方…いきなりあんなことしてごめん…」

み「あの…あ…ありがとう…!わ…私な…あのおかげでな…思い出したよ!私がんばってここにいるのか、健也と付き合ってたことも…全部…!」

!!!!!!??

健「本当に!?!じゃあ俺のこと…」

み「うん!今までごめんな…いつも来てくれてありがとう…!」

健也はみさとを抱きしめたい気持ちでいっぱいだった。

だがなんとかこらえ、みさとと病室まで来た。

そこにはいるはずのみんなはいなかった。

代わりにメモがあり

『そろそろ大阪に帰るね 泰成・千尋・彩華・俊・翔太』
と書かれていた。

目…

み「みんな帰っちゃったんや。」

健「そうだな。」

み・健（…気を遣わせちゃったな…）

それからみさとと健也は今みさとが思い出したばかりの思い出を話した。

何時間が過ぎただろう…外はすっかり日が暮れていた。

み「健也、もう暗いし帰った方がいいんじゃない？お母さんも心配するやろっし…」

健「大丈夫。母さんには連絡しといたから。」

み「何て連絡？」

健「もちろん…今日は病院に泊まるからって。思い出したばかりなんだしそばに誰か居た方がいいでしょ？」

み「ありがとう…！」

みさととは健也の心遣いがとても嬉しくて笑顔でそう言った。

健「みさとが寝るまで起きて隣に居るからね！」

み「ありがとう！ごめんな…」

みさととは健也の心遣いは嬉しい…でもそれが健也の重荷になってしまっことを一番恐れていた…

みさとが目を覚まさなかつた1ヶ月の間ずっと健也に心配をかけていた…意識が戻ってからも気を遣わせてしまっていたのではないか…みさととはいろいろ不安を抱えていた。

みさととは知っていた…

健也が時々寂しそう…切なそう…そんな目で自分のことを見ていたことを…

あの目にはどんな理由があったのか…

何か深い意味のありそうな目だった…だから尚更みさととは気掛かり

だった…

どんな理由だったにせよ、いい理由な訳がない…

そんなことを考えているうちにみさとは眠りについた…

健也はそっとみさとに布団をかけ、優しく髪を撫でてキスをした…

その後、しばらく健也はみさとを見つめていた…

その顔はとても優しい顔で愛しさに満ちていた。

だがその目の奥に、どこか寂しそうで、今にも涙が流れそうなほどの切なさがあった…

みさとが何度か見た顔はその顔だった。

しかし明日、みさとがその目の本当の理由を知ることになるとは思ってもみなかった。

空…

翌朝先に起きたのはみさとだった。

み（泊まるならソファ使えばよかったのに…風邪ひいちゃう…）

みさとは近くにあったカーディガンを健也にかけ、トイレに行こうとベッドから降りた。

みさとがトイレの近くに來ると話し声が聞こえてきた。

みさとは音をたてない様にドアに近付き、耳を傾けた。

医「余命のことをみさとさんに伝えますか？」

み・母「はい…でもまだあの子は記憶が戻って間もないですから…もう少し様子を見てからに…」

医「しかし…あと1ヶ月の命…あまり余裕はありませんよ…」

み・母「考えさせてください…」

医「わかりました。」

み（…！！！！！！！！…？）

ガチャツ

み（やばい…！）

みさとはすぐ隣のトイレに隠れた。

コツツコツツ

みさとの母親は通り過ぎて行った。

み「はあはあはあ……」

み（今の話って…どういうこと…？私の余命…しかも1ヶ月…聞き間違え？でもはっきりと『みさと』『余命』『1ヶ月の命』って言うてた…これって健也も知ってるのかな…あつだからいつもあんな目を……！！…そっか…そういうことやったんや…健也の…あんな

表情を作ったのは私：！？健也を不安にして：心配かけて：泣きそ
うな顔まで作らせて：私：私……）

みさとはいつの間にか走り出していた。
息を切らしながらエレベーターのボタンを押した。

途中看護士にあつたがみさとは平然とした顔をしてある場所へと向
かって行った。

そして目的の場所に着いた。

ガチャツ

ヒュー

みさとは屋上の扉を開いた。

とてもいい天気で気持ちのいい風が吹いていた。

みさとは近くにあつたベンチに倒れ込む様に座った。

そして上を見上げた。

：立体に見える雲：薄く広がって細長い雲：飛行機雲：孤立した
小さな雲……

みさとはいろいろな雲を見つけた。

みさとは空が大好きで何かあつた時はいつも空を見上げていた。

いじめられた時：辛い時：悲しい時：おじいちゃんが亡くなった時

：おばちゃんが亡くなった時：健也に告白された時：嬉しい時……

みさとは自然と昔のことを思い出していた。

み「あの時もこうやって空を見上げたっけ……」

みさとは呟いた。

み（私のせいでみんなが寂しそう：私がおれへんかったら健也は今
苦しんでもいいのに：私がおれへんかったらお母さんだってあんな
辛そうな声：出さんでよかったのに：全部：全部が私の存在のせ
いや：私の存在がみんなの人生狂わしてるんや……）

み「私さえ消えれば……それで全てが解決する……」

みさとはそう呟いて立ち上がった。

何のためらいもなく前へ進んだ。

ガシャツ

みさとはフェンスに登り、フェンスの向こう側へ降りた。

み「健也…お母さん…みんな…今までごめんな…これで終わりやから…」

そう言った後、みさとはふと思った。

み（車にひかれそうになったあの男の子…どうなったんやろう…私
すぐ気を失ったから…あの子は生きててくれたらいいな…）

み「私の分まで長生きしてな………」

そう言ってみさとは両手をフェンスから離れた…

生死：（前書き）

前話の時の健也達の状況とその後です。
少し長めです（＾―＾；）

生死…

みさとの母親は医者との話を終え、みさとの病室へ行った。

コンコンッ

返事がない。

寝ているのだろうと思い、ドアを開けた。

そこにはみさとの姿はなく、健也がベッドの横で俯いて寝ていた。

健也にはカーディガンがかかけられているところを見るとみさどがかけたのだろうと彼女は思った。

健「んっ…」

健也が起きたようだ。

健「あれっみさど？…あっおはようございます。」

み母「おはよう。」

コンコンッ

健み母「はい。」

2人が振り返ると悠と母親の小絵が立っていた。

小「この間は本当に…本当に申し訳ありませんでした…！あの…みさとさんは…？」

健「目が覚めたら居なくて…もしかしたら屋上にいるかもしれません…一緒にいきますか？」

小「はい！みさとさんにお礼、ちゃんと覚えてないんです。記憶が戻ったと聞いたので急いで来たんです。」

その間、悠はずっと小絵の後ろからそっと健也達の方を見ていた。

4人は屋上へ向かった。

案の定屋上の扉は開いたままだった。

4人は辺りを見回した。

健「ここじゃなかったか…」

そう言っただけで戻ろうとした時だった。

み「私の分まで長生きしてな……」

健也は声のする方を見た。

そこにはフェンスの向こう側に立つみさとの姿があった。
今にも落ちそうな所に立っている。

健也は止めに走った。

みさとは健也達の存在に気付いていないようだった。

みさとはフェンスから手を離れた……そして咳いた。

み「ごめんな……ばいばい……」

ガシッ

み「……えっ?」

健「はあはあはあはあ……何やってんの?」

み「……」

健「何やってんだよ!ここに立って何しようとした!?なあ……
んで死のうとするんだよ……」

み「……だっ………もん……」

健「なに!?聞こえない!」

み「……だつてみんな私の余命のこと知つて黙つてたんやもん!!」
健「……えっ?なんでそれ……」

み「さつきお母さんと先生が話してたの聞いたの!道理で退院させ
てもらわれへんはずや……健也だつて知つてたからあんな……あんな目
で見てたんやろ!?みんな知つてたのに……私だけ知らんといつ退院
できるんやろつとか……学校早く行きたいとか……いろいろ考えて楽し
く過ごして……それで何!?私は周りを苦しめてただけやんか!私な
んて……私なんておれへん方がいいんやもん!!私なんか目覚ますべ
きじゃなかつたんよ!!だから消えるの!死なせてよ……離してよ……
死にたい……死にたいの!どうせあと1ヶ月もないんやつたらいつ死
んだつて一緒やんかつ!」

健「違う……違う!!みさとは周りを苦しめてなんかない!みさどが

生きててみんな喜んだ…記憶がなくなつて関係なかった。意識が戻つてくれただけで嬉しかったんだよ…あと1ヶ月だつてみさとは長く生きててもらいたいよ…お願い…こっち来てよ…危ないから…」

み「いやや…いや…いやあ!」

みさとは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

み「タイムリミットを気にしながら生きたくなんてない…今すぐ死ねばそんなこと気にせんでもよくなるもん…お願い…お願いやから…死なせてよ…」

それは今にも消え入りそうな声だつた。

健也はフェンスを乗り越えみさとの隣に降りた。

そしてそつとみさとを抱きしめた。

みさとの体は小さく震えていた…

健「大丈夫…大丈夫だから…誰もみさとに死んでほしいなんて思つてないよ…」

み「そんなことない…そんなことないもん…」

みさとは自暴自棄になつていようだつた。

健「いい?みさと…もし今みさとがここで死んだらみんなどう思う?ああ自分は何もできなかった。その場に居ながら何もしてあげられなかつたつていつまでも思いながら生きるんだよ…そんなに俺らのこと苦しめたいの?」

み「違う…そんなんじゃない…でも…このまま生きてたつて誰も幸せになるわけじゃない…」

健「俺は幸せだよ…?みさとが生きてて俺の隣に居てくれて幸せ…だから死ぬなんて言わないで?お願いだから…」

み「不幸にするだけやのに…」

健「大丈夫…ね?」

みさとはゆつくりと健也の背中に腕を回した。

健也は微笑み、みさとの頭を撫でた。

健「生きててくれてありがとう…」

そう言つて健也は痩せ細つたみさとを抱き上げてフェンスの内側に

戻した。

健（そういえば最近みさととご飯何口かずつか食べてなかったな…
周りの様子とか感じてたんだろっな…いつもこんなになるまで1人
で抱え込んで…）

健也は自分も内側へ戻りながら考えていた。

生死…（後書き）

健也がみさとの自殺を止める時に言っていた最後らへんの言葉は私が彼氏から言われた言葉ですノノ
その他フィクションですが言葉のみ使わせていただきました。

体調…

みさとは泣いたまま健也に抱かれて病室まで連れて行かれた。

みさとは昼食にも手を付けなかった。

みさとが泣き止んだ後、小絵が話しかけた。

小「みさとさん？私この子の母親の小絵です。あの時は本当にありがとございました！みさとさんのおかげで悠は怪我一つ有りませんでした！でも…すみませんでした…！何とお詫びしていいか…

…」

み「あの時の！！よかった…無事やったんですね！私すぐ気を失ったんでどうなったか気になってたんです。」

みさとは心から安心した。

悠「お姉ちゃん…ありがとう！」

悠は満面の笑みでそう言った。

み「ううん。元気でよかった。でももう飛び出したらあかんよ？」

悠「はい…ごめんなさい。」

み「わかればいいよ。いい子やな。」

みさとはそう言って悠の頭を優しく撫でた。

それに悠は笑顔で答えた。

2人はしばらく話していた。

小「悠、もう帰るよ！」

悠「ええ！やだ！もつとお姉ちゃんと一緒に居るの！」

小「だめ！お姉ちゃんもうすぐ夕食なんだから。」

悠「はあい…ばいばい、お姉ちゃん」

悠は不満そうにそう言った。

み「ばいばい、悠くん」

みさとの母親は新幹線の切符を買っていたので2人が話している間

に帰っていた。

悠達が帰ると再びみさとの笑顔は消えた。

夕食が運ばれて来ても見向きもしなかった。

ちようどその時喫茶店で待っていた健也が戻って来た。

健「あの子もう帰ったんだ。」

み「うん…」

健「楽しかった？」

み「うん…」

健也は夕食の皿を見た。

全く手を付けていないようだった。

それどころかお茶すら飲んでいなかった。

健「夕ご飯は？」

み「いらぬい…」

健「お昼も食べてないんだから食べないとい！」

み「健也にあげる。」

健「みさとが食べなきゃ意味ないよ！ほら食べて！体壊すよ！」

そう言っつて焼魚をほぐしてみさとの口に持って行った。

みさとは口を開けようとしなかった。

健「ほら…口開けて…はい、あーん」

み「お腹すいてない。」

健「昨日の夕ご飯から何も食べてないんだろ？はい！」

パクッ

みさとは一口だけ食べて布団に潜り込んだ。

健「もつと食べなきゃ死んじゃうよ！」

み「死んでもいいから食べたくないの！ほっつといて！」

健「ほっつとかない！」

健也はずつとみさとの隣にいた。

でもみさとから話しかけられることはなかった。

翌朝になつてもみさとは起き上がるうとはしなくて、「ご飯も食べず、

一言も喋らなかつた。

健也はみさとの布団を剥ぎ取った。

健「みさと…お願いだからご飯食べて！せめて水分だけでいいから取ってよ…このままじゃ体調悪くなるから…」

み「食欲…ないから…」

みさとは息苦しそうにそう言った。

息は荒く、汗をたくさんかいていた。

表情：

その時健也は初めて気が付いた。

みさとは起き上がるうとしなかったんじゃない…起き上がれなかったんだ…

食事に手を付けていなかったのは食べられなかったからなんだ…

しんどくて喋れなかったんだ…

健也はあれがみさとのただの意地だと思って気にしなかった自分が情けなかった。

なんでもっと早く気付いてあげられなかったのかと自分を責めた。

今みさとは集中治療室…

またあの日の様に人口呼吸器を付けられ、ありとあらゆる機会に繋がれている…

これは発作の様なものだそうだった。

これからこういうことが増えてくるだろうとのことだった。

翌日みさとの意識が戻り体調も戻って来たので病室に戻ることになった。

いつもと変わらない声…場所…

だが1つだけ違うことがあった…

みさどが自分の足では歩けなくなったこと…車椅子に乗っていることだった。

正確には歩けない訳ではなくその体力がなくなってしまったのだ。

健也はみさとの笑顔をあれ以来見ていなかった。

話しかければ受け答えはするものの、笑うことはなくなってしまった。

健「ねえみさと？」

み「ん？」

健「キスしようか。」

み「…なんで？」

健（前なら照れて笑ったり恥ずかしがったりするのにな…）
健也から見た今のみさとは感情というものがなくなってしまうたか
の様に見えた。

いろいろな感情と戦ってきたからこそ、感情を持つことを恐れている
様だった。

健「好きだから…じゃだめ？」

み「別に…」

健「愛してるよ…みさと…」

健也はみさとを抱きしめた。

みさとは黙っていた。

健也はそんなことは気にせず、もっと強く抱きしめた。

自然とみさとの手も健也を抱きしめ返していた。

健也にとってそれはとても嬉しいことだった。

彼女は感情をなくした訳ではない…感情を表すのが苦手になってしまっただけなんだ…

自分は彼女に嫌われた訳じゃないんだと思うと嬉しくて勝手に抱きしめる強さが強くなる。

みさとは抵抗せず、抱きしめられていた。

ゆっくりと健也はみさとから離れた。

一瞬みさとに服を掴まれた気がしたがほんの一瞬でもうみさとの手は自分の膝の上にあった。

健「みさと…」

健也は呟いてそっとみさとにキスをした。

心なしかみさとの頬がピンク色に染まった様に感じた。

ちよっと困ったような、驚いたような…でも嬉しそうな顔…

みさとは少し笑った。

健也が見たかったのはこの顔だった。

キスをした時に見せるこの表情…

健「その顔だよ…俺、みさとの笑顔…好きだよ？だからみさとは
ずっと笑っててもらいたいって思う。だからね、笑ってよ…前みた
いに毎日を楽しく過ごそうよ！」

み「私…笑えてた？」

健「うん！」

み「そつか…！」

みさとはいつの間にか笑っていた。

健也は嬉しくて、優しくみさとの髪を撫でて微笑んだ。

健「その表情、忘れちゃだめだよ。」

み「わかった。今までごめんな…」

健「いいよ。今笑ってくれてるんだから…」

健也もみさとも幸せそうだった。

景色…(前書き)

更新遅れてすみません？

景色…

それからみさとは前よりも笑うことが増えた。

健也は嬉しかった。

自分に対して笑いかけてくれることもそうだが、なによりみさどが本来の自分を取り戻してくれたことが嬉しかった。

でもみさとの余命は気付けばもう1ヶ月を切っている…

半月しか…

健也はハツとした。

余命なんて関係ない…みさどが1日でも長く生きててくれればいいんだと自分に言い聞かせた。

み「……………んっ……………健也……………?」

健「あっ起きた?おはよう。」

み「おはよう。」

みさとはそう言うのと枕の近くにあったタオルを取って健也の頬に優しく当てた。

健也の目からは涙が流れていた。

み「どうしたん?」

健「えっ?」

健也は自分の頬に手を当て、なんでもないよと笑った。

みさとはなにもないわけないだろうと思ったが、健也が泣いていた理由がわかっていたのでなにも言わなかった。

み（私のせいやな……………）

そう思ってもみさとは表情ひとつ変えなかった。

これ以上健也を悲しませたくはなかったし心配もかけたくなかった。

み「あっ健也、しばらく待ってて……………行く場所あるからさ。」

健「行く場所?」

み「大丈夫、病院の中やから（笑）」

不安そうな健也にそう笑いながら言っ、みさとは車椅子に乗ってどこかへ行った。

み（健也に怪しまれてないよね…？）

みさとは屋上へ向かっていた。数日前、自分が死のうとした場所……でも今は違う…自殺なんて考えていない…今日ここに来たのはもっと違う理由だった。

みさとはカメラを取り出した。

周りの景色を撮った。

大好きな空をたくさん撮った。

み「ただいま。」

健「おかえり。どこ行ってたの？」

み「…それより健也、外行こ！外！」

健「えっ外？まだ暑いよ？」

み「いいやん、せっかくの晴れなんやしさ。こんな気持ちのいい日なんてもうないよ！行こ行こ！」

健「晴れなんてまだまだ……」

健也は途中で口を止めた。

もう晴れはないかもしれない…みさとはわかっているのだ……もうこれが最後のデートになるかもしれないことを……

中庭：（前書き）

更新遅れてしまいました（<―>）

すみません p）・、q（

中庭：

み「気持ちいいなあ…！」

健「そうだね。」

2人は病院の中の公園に来た。

公園と言っても遊具などがあるわけではなく、どちらかと言うと広場の様な所だった。

周りには木がたくさん生えていて、真ん中には小さな池があり、そこには短い橋がかかっている。

木の近くには木でできたベンチがある。

そんな小さな公園でもこの病院の患者達にとってはリラックスできる場だった。

子供からお年寄りまでいろいろな人が居てそこでは自分の病気や怪我のことは忘れられる…そういう場所なのだ。

健也は近くのベンチの横にみさとの車椅子を固定し、そのベンチに座った。

するとみさとはゆっくりと立ち上がった。

健「えっみさとっ危ないよっ！」

み「大丈夫大丈夫！」

そうは言ったもののみさとの足元はふらついていた。

み（やっぱり筋力も体力も落ちてるな…歩くのも久しぶりやしな…）

みさとは健也に気付かれたくなくて必死にふらつく足をまっすぐにして健也の隣まで歩いて行った。

なんとかかそこまでは行けたもののそこからがみさにとっては大変だった。

ベンチには手すりが無いため、ゆっくり座ることはできない。

だからと言って勢いよく座る訳にも行かない。

どうしようかと考えていると知らないうちに健也はみさとの目の前にいた。

健「もう…無理なら助けてって言えばいいのに…」

健也は半ば呆れた様に、でも優しくそう言つとみさとの両脇に腕を回してゆっくりと座らせた。

み「…ありがとう。」

みさとは嬉しくも、悔しくもあつた。

もう自分独りでは歩くことだけでも精一杯、座ることすらできなくなつてしまつた…

1 mもない範囲に移動しただけでみさとの息は上がつていた。

健「大丈夫？」

み「…へ…平気…！」

そうは言つたものの息が荒くなるのを抑えるのは大変だつた。

健「あつ喉渴いたでしょ？何か冷たいもの買ってくるよ！」

健也はそう言つて自動販売機の方へ走つて行つた。

みさとは健也が走つて行くのを見送つてまたカメラを取り出した。

何枚か写真を撮つて健也が戻つて来るまでにしまつた。

写真…(前書き)

またまた遅れてしまってすみません(< | >) っっ

写真…

健「はい、麦茶でいいよね？」

み「うん、ありがとう。」

2人は飲み物を飲みながらのんびりいろいろな話をした。

みさとはとにかく明るく、楽しく大切な《今》という時間を過ごしたかった。

だから沢山笑っていっぱいいっぱいしゃいだ。

健也是そんなみさとを愛しく思った。

いつまでもこうして居たい…みさとの笑顔をいつまでも見ていたい…でも健也はわかっていた…永遠に続かないことを…だからこそ思うことでもあった。

48

《お願い…離れて行かないで…俺を独りにしないで…ねえみさと…これって我儘なのかなあ……………》

気が付くと健也はみさとをじっと見つめていた。

み「…………健也？どうしたん？」

顔を紅く染めてみさとは恥ずかしそうに聞いた。

健「なんでもないよ。」

健也は笑顔でそう答え、照れた顔を隠す様に優しくみさとの頭を撫でた。

看「ご飯ですよ。」

返事をする看護師さんが夕食を運んできた。

み「ありがとうございます。」

看護師さんは夕食を机に置くと部屋を出た。

み「いただきます。」

みさとはゆっくりとご飯を食べた。

食べるペースは前に比べると随分と遅くなった。

顎の力も衰えてきた為もあるが手の動きがゆっくりになったのが一番の原因だった。

みさとが夕食をとっている間、健也はずっとみさとの隣に居た。

み「ごちそうさまでした。」

健「じゃあ、俺そろそろ帰るね。」

み「うん、ありがとうございます!」

みさとがそう言うつと健也は優しく微笑んでみさとにそっとキスをした。

みさとは顔が熱くなるのを感じて俯いた。

健也はその頭を撫でた。

健「また明日ね。」

み「うん!ばいばい。」

2人は明るく別れた。

……しっかりとしたみさとの声を聞くのがこれが最後になると
は……健也は全く予想もしていなかった……

機械音…(前書き)

遅れてしまい…すみませんでしたm(|)mっっ

機械音…

健也はいつも通りみさとの病院へ向かっていた。

途中、健也はふと立ち止まった。

そこにあっただのはケーキ屋さんだった。

~~~~~

「このチョコレートケーキ美味しいなあ！」

「このチーズケーキも美味しいよ！」

「ほんまやー！」

~~~~~

健也の頭に浮かんだのはいつかの二人。

健也の足は自然にその店へ向かっていた。

健「チョコレートケーキとチーズケーキ一つずつ下さい。」

店「2点で760円です。」

健也はケーキを二つ買い、みさとの病室の近くまで来た。

ガラガラガラ

「……………を早く!」

「心肺停止状態です!」

「今用意してます!」

「呼吸戻りました!」

健也は医者と看護師が行き来している部屋を見た。

『坂元みさと』

ドサッ

「みさと…みさと……………!?!」

健也は目の前に広がっている光景を信じたくなかった。

たくさん機械に囲まれ何本もの管を繋がれたみさと。

その小さな顔は大きな透明なマスクに覆われている。

聞こえてくる音は無機質な機械音とマスクから漏れる音のみ。

ピッピッピッピッ……………

スー…スー…

その後二人が会話を交わすことはなかった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1291v/>

Forever memories...

2012年1月6日20時52分発行